

第28回企画展(会期：平成27年7月16日(木)～8月30日(日))

小笠原文庫から見た幕末維新

— 武家礼法から近代教育まで —

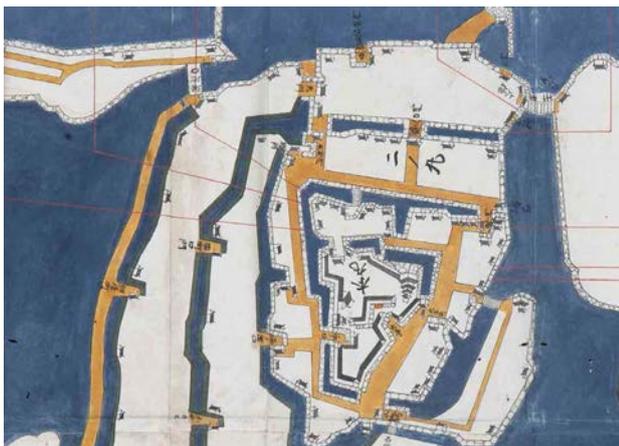


Kyushu Historical Museum Exhibition guide

1 小笠原文庫とは

小笠原文庫は、江戸時代に現在の福岡県東部を領した小倉藩の藩主、小笠原家に伝えられてきた約7000点の資料群です。小倉藩政をはじめ、武家礼法や朝鮮通信使の応接、近代の学校資料など豊富な資料が含まれており、平成17年(2005)には福岡県指定有形文化財となりました。現在はかつての小倉藩藩校を起源とする福岡県立育徳館高等学校の同窓会が所蔵しています。

本展では、この小笠原文庫の中から、主に幕末維新期の資料を中心に紹介します。この激動の時代は小倉藩と小笠原家にとっても苦難と模索の連続でした。特に慶応2年(1866)の長州藩との戦いでは、小倉藩は自ら小倉城に火をかけ、城は焼け落ちてしまいます。しかしこの状況下でも小笠原文庫の資料は大切に持ち出され、守られ続けてきました。こうして今日まで伝えられた小笠原文庫の資料からは、武士の時代に小笠原家が果たした役割と、時代の転換期を懸命に乗り越えようとした先人達の姿を見出すことができます。



小笠原家の居城を描いた「豊前小倉城絵図」(部分)

2 小笠原家のあゆみと小倉藩

小笠原家は12世紀後半、清和源氏の一族・加賀美遠光の二男長清が、出生地である甲斐国小笠原(現在の山梨県南アルプス市あるいは北杜市)を家名としたのがはじまりです。長清の子孫は主に信濃国(長野県)で栄え、また一族から幕府の武芸指南役も現れるなど、武家礼法を修める一族としても名を成しました。

その後戦国時代には一時所領を失いますが、小笠原貞慶とその子秀政が徳川家康に仕え、やがて譜代大名に発展します。そして寛永9年(1632)、秀政の子忠真は豊前小倉藩15万石の藩主に任じられました。小笠原家の小倉への配置は、外様大名の多い九州を監視する意味があったとされています。

また小笠原家は鎖国体制下での沿岸警備も担った一方、朝鮮通信使や琉球使節の応接など、当時の海外交流にも参画していました。特に文化8年(1811)、諸事情により朝鮮通信使を対馬で応接することになった際には、当時の小倉藩主小笠原忠固が対馬に赴き、幕府の上使として使節に対面しています。



小笠原家に伝わる馬術を記した「秘伝十六足」



小倉藩の川船を描いた「川御座船十歩一之図」、小倉藩の川船は朝鮮通信使の淀川遡上などに利用されていた。

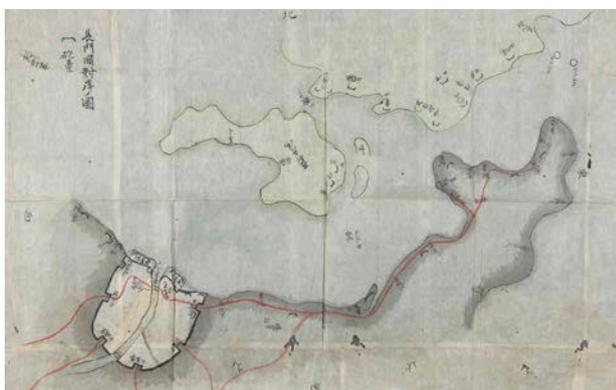
3 小倉藩の幕末維新

嘉永6年(1853)、浦賀沖にアメリカのペリー提督率いる黒船が来航し、これを契機に幕末の動乱が始まります。ペリーの要求に応じて開国を決断した幕府はその後、欧米各国と条約を次々に結びます。しかし、これらの条約は日本に不利であった上、天皇の許可を得ずに締結されたものでした。そのため国内では天皇を尊び外国を排斥する「尊王攘夷^{そのんのうじょうい}」の気運が盛り上がります。その急先鋒は、関門海峡を挟んで小倉藩の対岸に位置していた長州藩でした。

やがて小倉藩と長州藩は、攘夷をめぐる対立を深めていきます。文久3年(1863)、長州藩の朝廷工作などの結果、幕府は攘夷実行を宣言し、5月10日をその期日としました。この日以降、長州藩は関門海峡で外国船に発砲していきます。しかし小倉藩はこの時、幕府から指示があるまでは攻撃しないという命令を受け、発砲しませんでした。譜代大名である小倉藩にとっては、幕府の方針が最も尊重されるべきものだったのですが、長州藩からは不満を抱かれることとなります。

さらに慶応2年(1866)、政治情勢の変動の中で、幕府は長州藩と戦うことを決め、小倉藩は幕府方の一翼として長州藩と戦います。しかし戦いの最中に時の將軍徳川家茂^{いえもち}が病死し、動揺した幕府軍は次々に撤退、小倉藩は孤立状態で長州藩と戦うこととなります。そして小倉藩は自ら小倉城に火をかけ、田川郡の香春へ撤退、その後幕府が長州藩と休戦した後も、自らの藩を守るために翌年正月まで戦い続けました。

さらに戦いの直前には、当時の藩主小笠原忠幹が病死するなど、この時期は小倉藩と小笠原家にとって苦労と困難が絶えない時期でした。



長州藩と小倉藩の砲台を記した「長門国対岸ノ図」

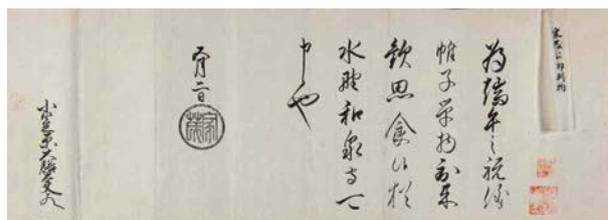
4 近代の小笠原家と豊津の学校

長州藩との戦いの結果、小笠原家は小倉から香春に拠点を移した状態で、大政奉還・王政復古を迎えました。その後、小倉藩改め香春藩は戊辰戦争に新政府側として参加し、さらに藩の再建に着手していきます。明治2年(1869)には、藩庁を現在の京都郡みやこ町豊津に移し、豊津藩と称します。そして版籍奉還など新政府の政策に対応すべく、様々な改革を行い、新たな藩づくりが模索されていたのです。

しかし明治4年(1871)、政府は廃藩置県を行い、すべての藩は廃止され、藩主は東京への移住を命じられます。豊津藩でも最後の藩主小笠原忠愷^{ただのぶ}が領民に別れを告げ、東京へと移っていきました。しかしその後も、小笠原家と豊前の地との縁は続きます。その象徴ともいえるのが、豊津に建つ学校でした。

この学校はもともと、小倉藩の藩校「思永館」から始まるもので、幕末維新の時期には藩庁同様香春から豊津に移り、新たに「育徳館」と称していました。廃藩置県後、この学校は資金難などでたびたび存続の危機に見舞われますが、その際小笠原家は地元の人々の願いに応じて学校に寄付を行い、存続に協力しました。こうした小笠原家の協力と関係者の熱意により、学校はその後運営主体や校名などを変えつつも存続し、現在も豊津の地で教育を続けています。

(学芸調査室 渡部邦昭)



第14代將軍徳川家茂が、小倉藩主小笠原忠幹に送った黒印状(部分)



明治初期の香春藩印(左)・豊津藩印(中)・豊津県印(右)
香春から豊津への移転と、藩から県への変化を示している

※資料はすべて福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵



編集 発行: 平成27年7月16日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/>